## フェルメールが見つめた17世紀のデルフト



写真1 - フェルメール作「デルフトの眺望」(マウリッツハイス美術館所蔵)

都市を描いた風景の名作、といったら何をおいてもフェルメールの「デ ルフトの眺望」が思い浮かぶに違いない。「名作の舞台から」の第一回は、 その舞台となった「黄金の世紀」と呼ばれた17世紀オランダのデルフトを 取り上げる。

ヨハネス・フェルメール (1632~1675) は、レンブラントとともにオラン ダが世界に誇る画家である。オランダ西部の町、デルフトに生まれたフェル メールは17世紀のデルフトで育ち、そして生涯を過ごした。フェルメールの 絵にはごく普通の人々を主題とするものが多い。「デルフトの眺望」は2点し か残せれていない風景画のひとつである。

16世紀末、東方貿易に目をつけた商人や資本家が次々に船をだして競争 が激化したことをうけ、1602年に統一東インド会社(頭文字からVOCと 呼ばれる)が設立された。日本ではちょうど江戸開府のころにあたる。東 方貿易は大きな富をオランダにもたらした。黄金の世紀の始まりである。 デルフトにも東インド会社の6つの支部の一つが置かれ、出航する船への 補給貨物の製造などによって都市が発展していく。

「デルフトの眺望」が描かれたのは1660年頃である。この絵が描かれた 場所は、デルフト市の中心部の南、コルク運河と呼ばれるあたりといわれ る。ここにはロッテルダム門とシーダム門という2つの市壁の門があり、



写真2 - 17世紀のデルフト古地図。Aが「眺望」が書かれ たと思われる地点、Bが東門のある場所 Cが新教会、Dが旧教会



写真3-東門の対岸からの眺望 「デルフトの眺望」とよく似た景色だが、本当は 写真4-「眺望」が描かれた地点の風景 絵にあった2つの門は壊されて今はない



これが「デルフトの眺望」の近景に描かれている。左のシーダム門には時計 台があり、時刻は7時35分ほどを指している。門の手前は運河の水面は朝空 の晴れ間と黒い雲の陰を微妙に映して、いいがたい光と陰のタペストリーを 見せている。南から北を眺望しているから朝日は右から照らし、遠景の新教 会の右半分が朝日を受けて光っている。画面左には旧教会の尖塔の先がかる うじて見えている。

デルフトの中心は、市役所と新教会が両端で対峙するマルクトと呼ばれる 広場である。フェルメールはこのマルクト近くのロウハウスで生まれた。広 場に面する建物の大半は17世紀に建築されたものだ。ヨーロッパの石の都市 は、日本の木と紙の都市に比べてよく残る。新教会も旧教会も17世紀と同じ ように立っている。

残念ながら「眺望」に描かれた2つの門は19世紀に撤去されてしまい、今 の景色は「眺望」とは似ても似つかない(写真4)。そこから1キロほど東には ロッテルダム門とよく似た「東門」が残されている(写真3)。角度を選ぶと 2本の小塔をもつ東門と新教会がまるで「眺望」と同じように見える。デルフ トの眺望を楽しむにはここが一番かもしれない。

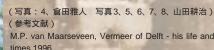


写真5-新教会とマルクト(広場) 左の黄色い大き なひさしの家はフェルメールの絵画を収集し たデシウスという画家の家

(文章 山田耕治)



たがそのまま建築を続けたそうだ 「眺望」 では突端だけが画面左にすこしだけ見える



星野知子、フェルメールとオランダの旅、小学館、



写真6・旧教会は運河に沿って立つ 少し内側に傾い 写真7・旧教会にあるフェルメールの墓標 パラの一輪 写真8・オランダ東インド会社のデルフト支部の建物 がさりげなくおかれていた



VOCの文字が見える